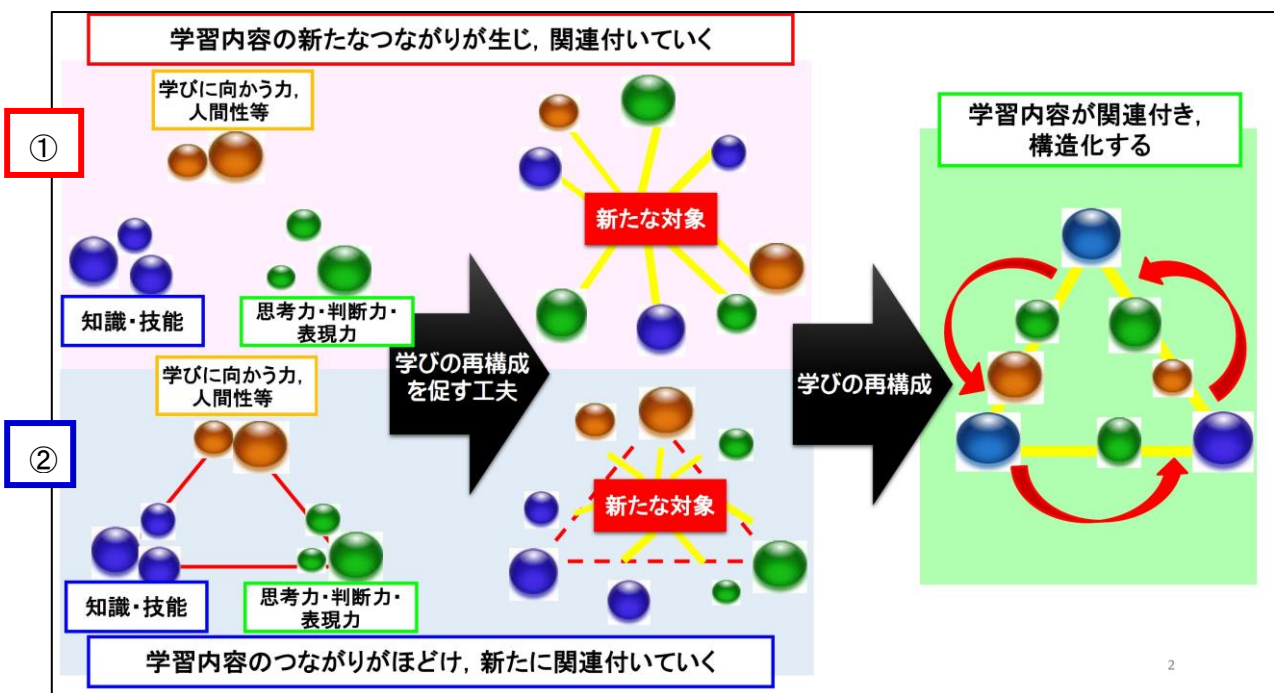


当校の今年度の研究概要—「学びの再構成」について

生徒の資質・能力の育成と「主体的・対話的で深い学び」を具現化するために附属新潟中学校の出した答えはこれだ！！

新学習指導要領において、学習内容は資質・能力の3つの側面（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」）から整理されました。「生きて働く『知識・技能』」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」を育成することが求められています。そのために、「主体的・対話的で深い学び」を視点にした授業改善が必要です。

「主体的・対話的で深い学び」を具現化するために、今年度の当校の研究では、「学びの再構成」に重点を置きます。「学びの再構成」とは、生徒が課題解決過程で深めた学習内容を様々な事象、現象、人など（実生活につながる要素となるもの）とつなげて捉え直すことです。課題解決を通して、生徒は学習内容の理解を深めていきます。その結果、学習内容は様々な事象、現象、人などと相互に関連付けられ、生徒一人一人の中で構造化されていきます。私たちはこの過程を授業で意図的に、明確化したいのです。



例えば、上記①、②の過程があると考えます。生徒は課題解決過程において、学習内容を深めていきます。しかしながら、これらの学習内容は相互に関連付けられ、構造化されたものになっていません。ここで、教師が「学びの再構成を促す工夫」を手だてとして講じます。

①の過程では、新たな対象を提示したときに、生徒は複合的に学習内容を新たな対象につなげて捉え直します。そして、学習内容の新たなつながりが生じ、関連付いていきます。②の過程では、新たな対象を提示したときに、つながっていたと考えていた学習内容のつながりがほどけます。そして、新たな対象を中心に、学習内容の今までと違うつながりが生じ、関連付いてきます。

学習内容が関連付き、構造化されることで、生徒は「概念を形成すること」「目的・場面に応じて表現できること」「〇〇的に捉え、問題を解決すること」など教科等の資質・能力を発揮します。結果として、単元最初と最後の物事、事象、現象などの見え方やかかわり方が変容し、教科等の学ぶ意味を見いだすようになります。

本日の公開授業では、授業研究では、生徒の資質・能力を発揮させるために「確かな学びを促す3つの重点」—「意味ある文脈での課題設定」「対話を促す工夫」「学びの再構成を促す工夫」から、特に「学びの再構成を促す工夫」に焦点を置き、授業を公開いたします。

【参考引用文献】

- 石井英真（2017）『アクティブ・ラーニングを越える授業』日本標準
- 田村 学（2018）『深い学び』東洋館出版社